

事例 16：居室前のバリケード

対象者の状況

- ⇒ 94歳、女性 要介護度5、寝たきり度B2、認知症高齢者の日常生活自立度
- ⇒ 食事中や食後に盗食行為が続き、そのため、他の利用者とテーブルを離れたり、食後すぐに居室に戻ったりしていた。
- ⇒ 食事が終わるとすぐに車椅子で徘徊を始めていた。

身体拘束の状況

盗食行為防止のため、食後居室に戻った後、部屋から出られないように居室のドアの前に可動式のスクリーンを使ってバリケードをしていたが、しばらくすると自傷行為（頭髪を抜く）が現れるようになった。

対応方法の検討

自傷行為はストレスによるものと思われたため、すぐにバリケードをおくことは止めた。

食べることから他のことに気持ちを向けられれば、盗食行為は落ち着くと考え、対応を図ることとした。

対 応

食べることから気持ちを切り替えるため、食事が終わるとすぐに居室へ誘導し、本人の好きなぬり絵や字を書くことができるように手元に道具を準備した。

経 過

次第に自傷行為はなくなっていった。

盗食行為は未だに現れるが、食事のつど職員が注意を払い、食後は本人の好きなことに熱中してもらうようにすることで未然に防げるようになってきた。

御家族も協力的で頻繁に面会に来られるので、精神的な安定も図られている様子である。

【着眼点（ポイント）】

食べることから気分を切り替え、本人の趣味などに意識を向ける工夫により行動障害が軽減し、拘束の廃止につながった事例。